ABP LIVE
Omotenashi: Japanese Cultural Sensitivity Workshop For Indian Athletes

「おもてなし：インド人アスリートに向けた日本文化理解のためのワークショップ」
2020 年 2 月 27 日発行

文化理解のためのワークショップの重要性について、キラン・リジジュ（Kiren Rijiju）スポーツ担当大臣は自国アスリートに向けて以下のようにコメントしました。
「日本の文化とエチケットはとても複雑です。あなたがたアスリートはインドを代表する存在であるため、君たちの文化を考慮した行動は、君たち自身にとって非常に大切です。我々はインド・オリンピック委員会（IOA）とインドスポーツ機関（SAI）と協力し、アスリートをしっかりとサポートしていくつもりです。インドの哲学が日本で形となることでしょう。また、スポーツの活躍への深い精神的なつながりを超越したいと考えています。」

（ニューデリー）インド人アスリートたちは、技術的に着用することが難しい着物を着ることで、伝統的な日本文化を学びました。キラン・リジジュ（Kiren Rijiju）スポーツ担当大臣自身も着物を着て、まるで侍のような風貌となりました。東京を目指すスポーツ関係者も試さずにいられません。

2020 年 2 月 27 日（木）にインド・オリンピック委員会（IOA）の協力のもと、インドスポーツ機関（SAI）によって開催された「おもてなし」ワークショップに、東京大会に参加するオリンピアン、パラリンピアンが参加しました。

東京を電車で移動する、着物を着る、正式な食事会で箸を使う、おじぎのエチケットといった複雑な日本文化に、スポーツ関係者が慣れ親しむことが主な目的です。

ワークショップはキラン・リジジュ（Kiren Rijiju）スポーツ担当国務相によって開設され、インド・オリンピック委員会（IOA）ラジーブ・メータ（Rajiv Mehta）事務局長、日本からは筑波大学 TIAS アカデミー長の真田久教授、ワークショップの講師であり元 CA の江上いずみ客員教授が同席しました。

文化理解のためのワークショップの重要性に関して、スポーツ担当大臣は以下のようにコメントしました。「日本の文化とエチケットはとても複雑です。君たちアスリートはインドを代表する存在であるため、君たちの文化を考慮した行動は、君たち自身にとって非常に大切です。我々はインド・オリンピック委員会（IOA）とインドスポーツ機関（SAI）と協力し、アスリートをしっかりとサポートしていくつもりです。インドの哲学が日本で形となることでしょう。また、スポーツの活躍への深い精神的なつながりを超越したいと考えています。」

レスリングのラビ・クマール（Ravi Kumar Dahiya）氏とディーパック・プニア（Deepak Punia）氏は大臣の言葉に同意し、以下のようにコメントしました。
「今年の夏、東京で過ごすにあたって、日本人をよりよく理解するために、このワークショップはとても役に立つと思います。」

射撃のアビシェーク・ベルマ（Abhishek Verma）氏は、以下のようにコメントしました。「選手たちが東京大会の選手村に入る前にこのワークショップを受けたことにより、よりよい準備ができていると思う。ワークショップに参加したことで、日本における文化的エチケットがとても重要であり、美しいことがわかった。」

毎日の挨拶から公式の場での立ち居振る舞い、公共の場でのエチケットから食文化といった日常生活におけるマナーなど、日本の伝統文化すべてをこれからも引き続き学ぶことが必要です。